

対馬市教育委員会へのインタビューと子ども寺子屋への訪問

江端 聡

1. はじめに

本レポートは長崎県対馬市についての調査記録である。

2018年8月6日から8月10日にかけてアクションリサーチを行い、そのうち6日に訪れた対馬市教育委員会でのインタビューと、8日に訪れた子ども寺子屋でのインタビューを本レポートにまとめた。インタビューの目的は、少子化が進む長崎県対馬市においてどのような教育指導が行われているのか調べることである。

2. 対馬市教育委員会 学校教育課 課長 中島清志さん

対馬市教育委員会 学校教育課 主幹兼主任指導主事 糸瀬英俊さんへのインタビュー

①対馬市の学校統廃合と少子化について

教育委員会の方々によると、現在、対馬市全体で小・中学校の統廃合が進んでいるという。2016年3月に厳原町の阿連(あれ)小学校が金田(かんだ)小学校に統合、2018年3月に同じく厳原町の大調(おおつき)小学校が金田小学校に統合された。今後も統廃合の計画があり、当該地域の方々に向けては、2年前から説明会が開かれているという。

対馬市では少子化による児童生徒の減少を受け、多くの小学校で複式学級制が採用されている。学校が小規模化したことで児童生徒の保護者からは「(保護者たちの)役員が固定化されて(同じ人が)ずっと役員を続けなければならなくなるのではないか」「(保護者の人数が少ないと)小さい規模の行事でも準備が大変だ」という懸念の声も挙がっているという。また、統廃合で使われなくなった校舎の使い道も課題となっている。インタビューの中で「合宿施設として使えばよいのでは」という案が挙がったが、現時点では使い道が決まっていないという。統廃合により地域から子供の声が消えることは対馬の人々にとっては招かれざる事態であるが、背景に複雑な事情があることを教えていただいた。

②中高生の離島について

対馬では中学卒業と同時に島外へ出て行く生徒の割合が年々増加しており、平成20年度に18%だった離島者の割合は平成29年度で33.8%へと大幅に増加している(対馬全体でおよそ260名いる中学卒業者のうち、80人が島外へ出て行く計算)。離島する生徒が増えたことよりも、対馬市全体の生徒数が大きく減少した(生徒数の分母が減った)ことがその原因となっている。

中学生が島外へ進学する理由は大きく分けて3つある。1つ目は、大学進学を目指し、より高い学力を身に付けることを目的に離島するケースである。島外へ出た学生は長崎市内や諫早市などの高校へ進学する。2つ目は、対馬にない学科での学習を求めて離島するケースである。対馬には看護学科や観光学科、工業学科などの学科がないため、それらへの進学を希望する生徒は必然的に島を離れることになる。島外の看護学科では、学科を卒業したあと付属病院で3~5年働くことを条件に学費を免除される学校もあるため、卒業後すぐ対馬へ帰ってくる若者は少ないという。3つ目は、より強い部活動を求めて離島するケースである。生徒自身が陸上や野球、サッカーなどの強いチームを求めて自主的に離島することもあれば、島外から来たスカウトに

引き抜かれて島を離れることもある。そのほか、(一般社団法人 MIT の) 吉野さんの話によると、「自分の子供を本土へ進学させたい」と考えている親もいるという。対馬には大きな病院が少なく、自宅の場所によっては通院に長い時間がかかる。そのため、医療施設の充実している長崎や福岡へ子供を送り出し、親自身もそこへ移住することで安定した老後を送るのだという。吉野さんは「おじいちゃん、おばあちゃんは、つしま病院まで行くのは大変ですからね…。それでもう息子たちがいる福岡に行きましょうってなっちゃいますから…自分がそうになったらそうだな、って」と仰っていた。

3. 対馬市の教育制度

①長崎県のコミュニティスクール政策について

長崎県では平成 28 年から平成 32 年にかけて、県内にある 21 の市と町それぞれに最低 1 校のコミュニティスクールを作ることを目標にしており、インタビュー当時(平成 30 年 8 月時点)では 10 校の登録が完了していた。

長崎県ではコミュニティスクールの定義を次のように定めている。「学校運営や学校の課題に対して、広く保護者や地域住民が参画できる仕組みで、「社会総がかりでの教育」の実現を目指します」。このコミュニティスクールを導入することによって、学校、地域、保護者が教育方針を共有し、各セクターが当事者意識を持って教育上の課題に取り組むことができるようになる。壱岐市の霞翠小学校がその例である。霞翠小学校は長崎県で初めてコミュニティスクールに登録された学校で、学校、地域、保護者が「自己実現がきちんとできる子ども」の育成を共通目標(課題)に、授業や地域行事といった側面から子供たちの教育を進めている。その結果、地域や保護者といったセクターが学校へ関心を持ち、子どもがあこがれの心を持つようになったほか、学校内でもいじめや不登校はないという。

対馬でもコミュニティスクール制度の導入が課題となっているが、各学校の校長からは「コミュニティスクールを支えるための運営協議会など、人員を恒常的に配置することができるのだろうか」と、制度を支えるための人員不足を不安視する声が挙がっており、思うように普及は進んでいない。また、長崎県には 10 年以上前から「学校支援会議」という、コミュニティスクールによく似た制度が県内の学区全てに導入されていたため、コミュニティスクールの導入が遅れているようだ。そのため、インタビュー中に「学校支援会議を、コミュニティスクールに円滑に移行させることはできないだろうか」という意見も挙がった。

②対馬の魅力を伝えるための活動

(1)ふるさと学習

対馬の魅力を地元の人たちに再認識してもらうべく、対馬市教育委員会は市内の各学校に「ふるさと学習(ふるさと教育)」を取り入れてもらっている。ふるさと学習とは、学校の授業を通じ、対馬の環境や文化、歴史、自然について子供たちに知ってもらうための取り組みである。教育委員会は(権限上許される範囲で)学習内容の指導をするのみで、カリキュラムは各学校の裁量で組まれていることが特徴である。3 日目に訪れた佐須奈中学校では、総合的な学習の時間にふるさと学習を組み入れていた。ふるさと学習で地域の郷土芸能、自然、職場などについて学ぶほか、対馬と関わりの深い「朝鮮通信使」について詳しく掘り下げる授業も行われている。また、仁田小学校では、耕作放棄地という地域の課題に対し、児童自らが主体的に取り組めるよう教育計画

が組まれている。畑作を行う過程を通じて地域について知識を深めたり、生物多様性の理解を進めたりする活動が行われている。子供たちに対馬について詳しく知ってもらい、ゆくゆくは島外へ出て行く彼らに対馬と島外の人間をつなぐきっかけになってくれたら、との願いが、この「ふるさと学習」に込められている。

教育委員会の中島さんは「(ふるさと学習を)リードしている先生がお話ししていたのですが、対馬のことをよく知らないまま出て行っている子供たちもいるのではないかな。対馬を出て行って、結局対馬のことを知らないまま島外で生活する子供たちもいるかもしれない。できたらそういうことはなくしてほしい。出て行くにしても、対馬のことを知った上で出て行ってほしい。そしたら、ひょっとしたらその子供は帰ってこないかもしれないけども、その子供が対馬のことを宣伝してくれることによって、対馬のことを知って行ってみようかなと思う人が出てくるかもしれない。可能性としては低いかもしれませんが、是非できたらそういう出会いを外で作って、対馬と何らかの形でつながってほしいな、と。そういう思いで授業を組み立ててみたらどうですか、という話し合いをしています」と仰っていた。

(2) 島っこ留学

対馬の魅力を伝えるために、教育委員会は「島っこ留学」制度を設けている。これは小学3年生から中学3年生までの子供を対象に、対馬市で1年間の民泊を体験できる制度である。今年は福岡から3名が来島しており、西小学校に1名、西部中学校に2名が在籍している。対馬市では子供たちを受け入れる里親になってくれた方に、子供1人当たり月額70,000円(対馬市から40,000円、保護者から30,000円)の助成金が支払われる。しかし現在、里親は峰町の方1名(もともと旅館を経営されている方)だけである。

4. 子ども寺子屋

①概要

子ども寺子屋は、2014年から対馬市が夏休み期間中に開催している催しである。地区の公民館で小学生を対象に夏休みの宿題や自由研究を行う場が設けられている。一度の開催につき、小学1年生から6年生まで20名程度が参加している。今回私たちが訪れた佐須奈地区では、研究で来島する大学生や「もやいの会佐須奈」による学習の補助、レクリエーションによる交流などが行われていた。

②子供たちとの関わり

快活で人懐っこい子供が多く、初対面でも気兼ねなく話しかけてくれる子がたくさんいた。学年の異なる子同士でも頻繁にコミュニケーションが交わされており、人間関係の垣根が低いように見受けられた。学習時間は真剣に課題へ取り組み、休み時間には多くの子供たちが教室の空きスペースで鬼ごっこなどをして遊んでいた。

子供たちから東京がどのような場所なのか訊かれることが多く、都会への関心がうかがえた。私たちが東京の大学から来たことを伝え、「都会の人間だ…」と少し驚いた表情を見せてくれた。そのほか対馬について、島内に映画館がないため、見たい映画がある時は近所のレンタルショップでDVD等が発売されるまで待たなければならないという話や、「ディズニーランドに行ったことがある」「(島外で)芸能人に会いたい」など島の外への関心も語ってくれた。

学習時間の後は、小学生やもやいの会の方々と一緒に、対馬の生き物にまつわるクイズ形式のレクリエーションを行った。ツシマサンショウウオ、チョウセンケナガニイニイなど、名前を覚えるのも難しい生き物ばかりを問題にしたが、子供たちは難なく答えていき、正答率はおよそ6割を超えた。なぜ島内の生き物に詳しいのか子供たちに尋ねてみると、何人かの子供たちが「テレビで見た」「これテレビでやってた」と答えてくれた。

5. まとめ

①対馬市の学校統廃合と少子化について

若者が対馬から離島する原因は様々だが、最も大きな要因は、若者自身が「対馬での就業は難しい」と考えているからだとは私には思っている。対馬は自然が豊かであり、農業や漁業、林業といった一次産業が盛んな地域である。しかし、日本においてそういった働き口はグローバル化の波を受けて次々と廃業を迫られており、対馬市においても一次産業従事者の数は昭和35年の統計から減少し続けている。二次、三次産業も、人や原料の出入りが海路を経由しなければならないため、多くのコストがかかり、持続的な経営を行うことは難しい。それゆえ、主要産業の衰退が若者の危機意識を煽り、彼らが自発的に島の外への就業を考えるようになったのではないだろうかと考えた。

もちろん、都心と同じように工場や高層ビルを乱立させ、島内で何もかも完結できるよう産業を発展させることで、若者の流出を防ぐこともできるだろう。しかし、対馬市の美しい自然を破壊することは島の生態系および文化を破壊することと同義であり、将来の持続可能性を鑑みると良い選択とはいえない。

そこで、対馬の豊かな自然を守りつつ、交通の便で不利な対馬市で雇用機会を増やすためには「ソフトウェア産業」を開拓していくのが最も良い案ではないかと考えている。ソフトウェア開発に必要なものはパソコンと、エンジニアが働くための建物のみである。つまり、自然を薙ぎ倒して大規模な工場や建物を作る必要はなく、商品を市場へ流通させるための交通インフラも不要ということである。また、オフィス用の建物は市内の廃校が利用できるだろう。廃校をソフトウェア会社のオフィスビルとして利用し、若者の雇用機会を増やすことで人口流出を防ぐことができないだろうか考えた。

②子ども寺子屋について

子どもたちが生き物の名前に詳しいのは「ふるさと学習」のおかげだと思っていたが、彼らはテレビメディアから知識を得ているという。インタビュー後、長崎のローカル局から子ども達の知識の源となっていそうな番組を探したが、それらしいものは見つからなかった。NHKが対馬の生き物を取り上げることもあるが、それも年に数回の頻度であり、情報も限定的なため彼らの知識量と釣り合わない。結局、彼らがどこから情報を得ているのかわからないままリサーチを終えてしまったため、もう少し話を掘り下げてインタビューをすればよかったととても後悔している。

③対馬市を訪れて

初めて対馬を訪れて驚いたことが2つある。1つは、人間関係の垣根の低さだ。子ども寺子屋の小学生たちは学年の異なる子供たち同士で仲が良く、大人である私たちにも分け隔てない接

し方をしてくれた。また、(民泊の) 平山さんのお宅では、私たち以外にたまたま別の授業で来島していた3人の大学生にその場でご馳走を振舞われるなど、「自分と関わりのない人間」が相手でも寛大に受け入れていた。アクションリサーチの案内をしてくださった吉野さんや市役所の方々は、私たちと初対面であるにも関わらずとても親切にしてくださった。私がまだ小学生だった頃、「知らない人についていけないこと」「話しかけられたら逃げること」というように、自分と関わりのない人間に対して閉鎖的な態度を取るよう学校や地域で教えられていたので、対馬での様々な出会いは自分にとって大きなカルチャーショックとなった。

もう1つは、人間と自然との距離が近いことだ。対馬は自然が豊かであることに加え、市全体で「ふるさと学習」に取り組んでいるためか、子供たちが生き物や自然に対して強い関心を持っているように思えた。中でも最も印象的だったのは、対馬高校ユネスコスクール部の生徒が興味津々にビオトープの池へ足を踏み入れていたことだった。沼底を踏みしめ、笑いながら水辺の生き物を採集する彼女たちはとても楽しそうだった。

この「ふるさと学習」の真骨頂は地元の魅力の再発見だけではなく、自然に対して子供たちに親しみを持たせることにあると私は考える。自然を「自分達と縁の遠い存在」と捉える考え方を、地元という「教材」を利用してより親しみやすいものに変えていくことが、将来起こりうる無益な開発や公害を防ぐきっかけになるのではないかと。「自然の中には多くの生き物が暮らしていて、彼らの中には私たちの生活を根底から支えてくれているものもいる」という当たり前の事実を前提に、普段何気なく口にしている肉や野菜、果物を「生き物」という枠組みで捉えられるようになった時、自分がどれだけ身の回りの生き物に支えられて生きているのか、どうして自然を守らなければならないのかについて、考えるきっかけにもなるだろう。自然がもたらす恩恵を踏みにじるような乱開発や公害を防ぐためにも、対馬の「ふるさと学習」のような、子供たちが「自然」に目を向けるきっかけになる教育の在り方が全国で普及してくれることを願っている。

参考文献

長崎県, 2017, 「長崎版コミュニティスクール・リーフレット」。

<http://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2017/10/1509324897.pdf>

対馬市教育委員会, 2018, 「対馬市 島っ子留学」。

<http://www.shimakko.net/index.html>

長崎県対馬市, 2015, 「対馬市長期人口ビジョン」。

<http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/web/updata/tyoukijinkobijyon.pdf#search=%E5%AF%BE%E9%A6%AC%E5%B8%82+%E4%BA%BA%E5%8F%A3%E6%8E%A8%E7%A7%BB>

長崎県壱岐市, 2016, 「【実践発表】長崎県壱岐市教育委員会」。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/suishin/detail/_icsFiles/afiel_dfile/2016/11/29/1375471_02.pdf

(えばた・さとし 立教大学社会学部現代文化学科 3年 阿部治ゼミ)